

CIEC 第 117 回研究会報告

【開催概要】

テーマ 学びの空間としてのラーニングコモンズ

開催日 2019 年 1 月 05 日(土) 13:00 - 17:00

会場名 早稲田大学 中央図書館 1 階 会議室 (〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1)

共催 小中高部会・オープンエデュケーション部会共催

【プログラム】

13:30 - 13:40 開会の挨拶

13:40 - 14:20 講演「新しい図書館のありかた

～ラーニングコモンズとコンソーシアムを中心として～」

深澤良彰氏(早稲田大学図書館長・基幹理工学部教授)

14:30 - 15:10 講演「これからの大学図書館の在り方」

中山貴弘氏(大阪教育大学 学術情報課長)

尾崎拓郎氏(大阪教育大学 情報処理センター)

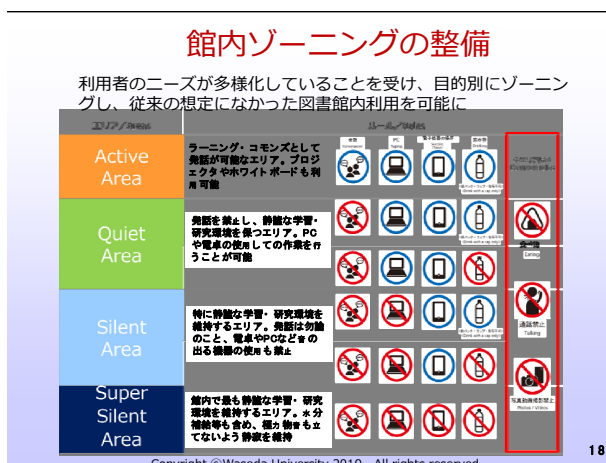
15:10 - 15:50 早稲田大学中央図書館 ラーニングコモンズ見学

16:00 - 16:30 ディスカッション

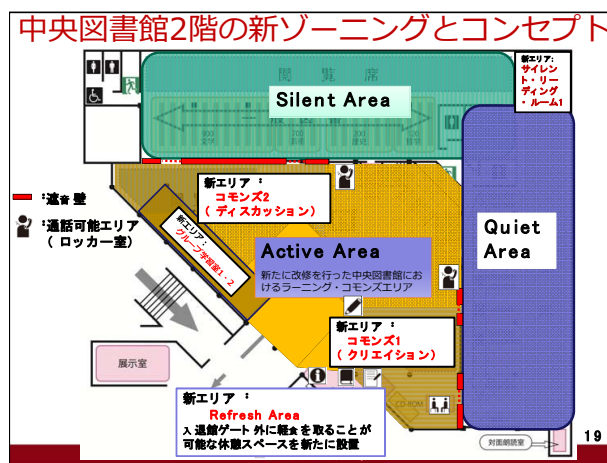
司会：石谷 正(北海道網走南ヶ丘高等学校・CIEC 小中高部会世話人)

【開催報告】

プログラム前半は早稲田大学図書館長・基幹理工学部教授、深澤良彰氏よりラーニングコモンズと図書館コンソーシアムの話題を中心として新しい図書館のあり方について講演があった。能動的学修、プロジェクト型学習、反転学習などに代表される新しい教育／学習方法の登場により教育方法に変革があること、またプロジェクト型研究への研究費のシフトなど研究方法にも変革が起こっていること。これら教育と研究の変化に対応していくため図書館自身も変革が必要な時期に差し掛かっている。その変革のひとつとして、早稲田大学中央図書館にラーニングコモンズを整備することになった。早稲田大学の場合、キャンパスが分散していたり、学部 1 年生から大学院生のみならず、早稲田大学高等学院の高校生にも対応できたりする必要があるため、集中ではなく分散型のラーニングコモンズを設置する必要性があることが示された。図書館の中に設置されたラーニングコモンズや教室を改装して設置されたラーニングコモンズ、留学や統計処理のサポートなど機能別に学内に様々なラーニングコモンズを実現してきた経緯がある。ラーニングコモンズを整備するために、なぜ図書館に作るのか、本を減らしてまで作るラーニングコモンズと教室を改装して作るラーニングコモンズの違いとは何かなどを図書館員と議論し、アカデミックな雰囲気を残しつつ設計したことが述べられた。「資料の活用・多様な学習／研究スタイルへの適応・交互交流／啓発・人的サポート」の 4 つをラーニングコモンズのコンセプトとし、図書館内の館内ゾーニングを見直し、4 つのゾーンに分けたことが示された。(図 1、2)



(図1) 館内ゾーニングの整備



(図2) 中央図書館2階のゾーニング

中央図書館ラーニングコモンズは2018年10月1日にオープンした。平均入館数は昨年度に比べて増えてきていること、滞在時間も長くなってきて資料を利用する時間も増えていることからラーニングコモンズに学生が集まってきていることが示された。(図3、4)

(まだ少しですが)
中央図書館LC改修工事の効果検証
(2018年12月館内利用調査)

2018年度改修工事前後の、1日の平均入館者数

	6月	7月	10月	11月
平均入館者数	2211	2748	2088	2250
前年度同月比	-216	-303	145	79

調査日における滞在時間および閲覧・資料利用量

調査時間帯	延べ滞在時間 (単位:分)		延べ閲覧量 (単位:分)		閲覧率		延べ資料利用量 (単位:分)		資料利用率	
	2017	2018	2017	2018	2017	2018	2017	2018	2017	2018
9:00-12:00	24660	30060	10620	11340	43.1%	37.7%	15480	20700	62.8%	68.9%
12:00-15:00	84420	98280	25200	30420	29.9%	31.0%	41220	63000	48.8%	64.1%
15:00-18:00	96120	102060	45900	28080	47.8%	27.5%	70560	61920	73.4%	60.7%
18:00-22:00	72960	96960	15840	35520	21.7%	36.6%	45600	81120	62.5%	83.7%
全日	278160	327360	97560	105360	35.1%	32.2%	172860	226740	62.1%	69.3%
※入館者1人ごとの滞在時間・利用量	104.9	114.8	36.8	37.0			65.2	79.5		

24

(図3)

(まだ少しですが)
中央図書館LC改修工事の効果検証

	座席数*	利用者数	利用率	エリア利用率	2017年同エリア利用率
2階	2階 Silent Area	203	65	32.0%	32.0%
	サイレント・リーディング・ルーム	22	3	13.6%	
3階	3階 Quiet Area	242	98	40.5%	30.4%
	3階 Silent Area	229	56	24.5%	
	3階 Quiet Area1	167	57	34.1%	
	3階新聞・雑誌コーナー	86	30	34.9%	
Active Area	3階 Quiet Area2	202	65	32.2%	52.2%
	2階 Commons1	51	29	56.9%	
	2階 Commons2	109	47	43.1%	
	2階グループ学習室1・2	66	39	59.1%	
	3階グループ学習室C	25	16	64.0%	33.6%
中央図書館2・3階・Active Area計		1402	505	36.0%	29.5%

Copyright © Waseda University 2019. All rights reserved.

(図4)

深澤氏は世代別ラーニングコモンズについて定義された。ファミレスのような椅子や動かせる机など什器だけが置いてあるラーニングコモンズは第1世代の古いラーニングコモンズであり、日本の多くのラーニングコモンズはこのレベルで止まっている。同志社大学の良心館はワンストップサービスで様々なサービスが提供されているところが優れており、様々な機能をラーニングコモンズに展開していくことが課題であると述べられた。教育・研究の変化に対応する学習支援・研究支援環境の整備が次のステップであり、図書館として何がどうできるのか、学生や研究者によりそうには何が求められるのかを考えているとラーニングコモンズ整備のまとめとして述べられた。(図5、6)

世代別ラーニングコモンズ

- 第1世代：スペースを確保して、そこに什器を整備
 - 日本の多くのラーニングコモンズはこのレベル
 - 453大学（全778大学の58.2%）で、ラーニング・コモンズ整備・活用※
 - この5年間で約2.5倍に増加
 - 特に、国立大学においては、その91.9%で整備終了
- 第2世代：第1世代のラーニング・コモンズにおいて、各種のサービスを展開
 - 同志社大学 良心館
- 第3世代：第2世代のラーニング・コモンズにおいて、学習支援・研究支援環境を整備

※文部科学省、平成28年度学術情報基盤実態調査～大学における教育研究活動を支える大学図書館及びコンピュータ・ネットワーク環境の現状について～
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/03/1383655.htm

Copyright ©Waseda University 2019. All rights reserved.

27

(図5)

今後考えていくべきこと

- ラーニングコモンズにおける学習・研究支援環境の実現
 - どんな機能・サービスを提供すべきか
 - 飲食、各種相談（ライティングセンター、留学、カウンセリング等）、英語スペース等
 - 更なる図書館としてのサポート
 - 各学院、研究科等との連携、協力体制の構築
 - 助手・助教の活用
 - 什器、ハードウェアの追求
 - 協同学修を支援するハードウェアのあるべき姿
 - 支援ソフトウェアの実現・選定
 - 大学院学生等をどのように利用していくか
 - 非常に質の良いスチューデントジョブ
 - 学生・教員等への周知

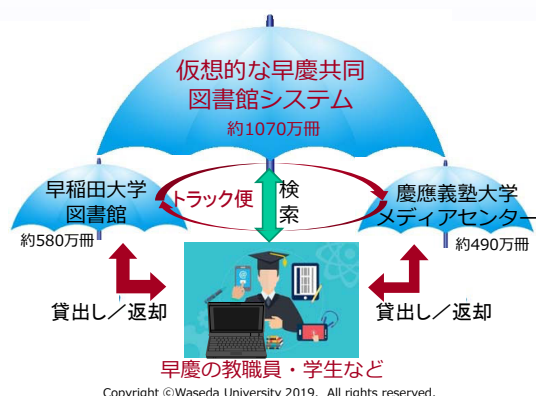
Copyright ©Waseda University 2019. All rights reserved.

28

(図6)

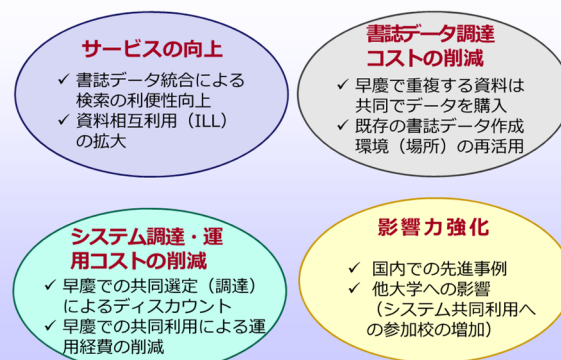
続けて、図書館コンソーシアムの話があった。大学図書館における運営費と図書資料費について各大学とも予算が軽減される中で電子ジャーナルのコストが高騰していること、平成28年には紙の図書の費用よりも電子図書の費用が上回る中で、他大学と組んで相互利用できないか検討している。具体的には慶應大学の図書館とコンソーシアムを組むことで、利用者1000万人規模の早慶図書館ができることが示された。1986年より早慶図書館の相互利用協定が締結されており、自分の大学で購入した書籍は自分の大学の教職員・学生だけのものであるという概念を捨て早慶での図書館業務の共同化実現のための体制の確立方法や課題を示された。現在開発中のシステムでは早稲田大学、慶應大学それぞれのシステムに加えて、仮想的な早慶共同の図書館システムがクラウド上に存在する。(図7) これらのシステムが完成後期待される効果として図8のようなサービスの向上、書誌データ調達コストの軽減があると示された。

現在開発中のシステムの構成 (利用者目線)



(図7)

期待される効果

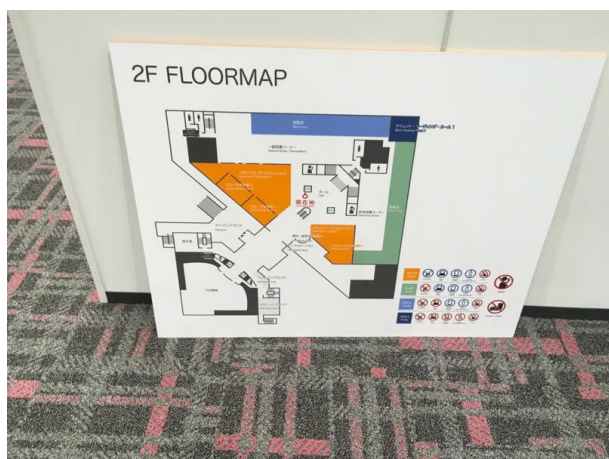


(図8)

プログラム2つ目では大阪教育大学学術情報課長中山貴弘氏、大阪教育大学情報処理センター尾崎拓郎氏から「これからの大学図書館の在り方」について講演があった。中山氏はこれまで、貴重資料の電子化、機関リポジトリ、電子ジャーナルの契約など電子図書館の構築やラーニングコモンズの設置・運用に従事してきた。本講演では大学図書館のトレンドと大阪教育大附属図書館の活動について示された。大学の図書館のトレンドは90年代電子化・情報化が進展し、図書館へ行かなくてもサービスが提供されたり、研究室からでもアクセスできるようになってきたりした。法人化により予算が削減されていく中で、電子ジャーナルの価格は高騰し続ける、などの課題がある中で「出会い系」と「アウトリーチ系」という2つのキーワードを出され、現在の取り組みを紹介された。日本で初めてラーニングコモンズを取り上げた文献では、「学部教育において学習理論が知識の伝達から知識の創出・自主的学習に移行したことを反映したネット世代の学習支援を行う図書館施設もしくはサービス機能」と紹介されており、各大学ではアクティブラーニングへの転換と情報入手がインターネット化した時代に対応する学習支援の場所、また出会いの場として、ラーニングコモンズを設置してきた。ラーニングコモンズを構成する要素として、「情報資源の入手とそのための情報リテラシー教育」と「アクティブラーニングを行う場所」の2つがあるが、情報リテラシー教育という側面が重視されていない。また、学習支援は提供されているが、あまり利用されていない。需要はあるはずだが、図書館員に聞いていいということが利用者に伝わっていないのがラーニングコモンズの課題であると述べられた。2つめのキーワードであるアウトリーチとは、元々は「手を差し伸べること」であり、文部科学省の定義では、図書館サービスの圏域内であるにもかかわらず、これまでの図書館サービスが及ばなかった人々に対してサービスを広げていく活動のことである。近年、アメリカの大学図書館では、対面でない、あるいは図書館外で提供されるサービスを広くアウトリーチサービスと呼ぶことが一般的で、具体的にはライブラリアンが図書館の建物を出て直に教育・研究の現場でサービスすることで、学生・教員を対象とした個別相談やワークショップ、ニュースレターや調べ物ガイドの作成、情報リテラシー教育戦略のためのカリキュラムマッピング、教員に機関リポジトリへの寄与を促すなどが司書の仕事の半数近くを占めていると説明された。大阪教育大附属図書館ではアウトリーチ活動の一環として、図書館職員が授業に出て行って情報リテラシーを教えることを行っている。1回生対象の教職入門、これから卒論のテーマを決める3回生対象の英語科評価論において情報検索実習を行った。またアウトリーチ活動の目玉として図書館員のオフィスアワーを設けたが利用がなく、図書館員に質問していいということを知らない学生が多いことが明らかになった。図書館は他の部局と連携して大学として学生にやっている学習支援を一体的にやっていく必要があるため、学生の活動についてもっと具体的に知る必要があったり、図書館のサービスを館内に限定する必要はなくもっと図書館から出て行ったりした方がいい、とこれからの大学図書館についてまとめられた。

続けて尾崎氏からは、パソコン必携化後どのように活用していくかの話題が提供された。情報基礎科目を全学共通内容と専攻独自内容で構成したことや学習支援ツール・テストツールなどを利用して、コンピュータの必携化後どこでも PC 教室になり、学生の身近なツールとして利用できる環境づくりを行っていること示された。コンピュータ必携化に際して、ヘルプデスクの存在が不可欠となり、学生の手を借りながら ICT 教育支援ルームを立ち上げた。そこでは新しいコミュニティが形成されている。ヘルプデスク主催の講座を開催して、ラーニングコモンズを会場として図書館の学生サポートスタッフと共同で企画を行っている。レポートの書き方とプログラミング体験講座を開催した。11 月には電子黒板利用者講習会も開催した。コンピュータ必携化をした取り組みは、うまくはいつているものの、学生が使いこなすまでには至っていない。学生が ICT を活用するための促進剤としてヘルプデスクを利用していくことが示された。

講演後は、ラーニングコモンズの施設見学を行い、質疑応答を行った。質疑応答では、中央図書館ラーニングコモンズの立地について、今後設置予定の 3 階ラーニングコモンズをどのような規模で設計するのか、図書館内の段差について、什器の設置について、ラーニング設置者が願うラーニングコモンズでの過ごし方、正しい使い方など幅広く議論が交わされた。



(文：森棟 隆一 白百合学園中学高等学校・CIEC 小中高部会世話人)